

佐久間彊先生を偲ぶ —中曽根康弘元首相との友情—

小 川 國 彦
(千葉経済大学特任教授)

去る九月二十二日、千葉経済大学で行われました佐久間彊先生の学園葬に、私は末席をけがす教員の一人として列席する機会を得ました。

この葬儀で、私は、来賓の筆頭に元総理大臣の中曽根康弘氏のお名前があり、さらに弔辞を頂くということで大変に驚きました。

故人の佐久間彊先生には、先生が、かつて昭和四十九年四月、千葉市長選に立候補をされた際に、千葉市選出の県会議員から、党派を超えて先生を応援しようという呼びかけがあり、先生の選挙に数日、応援弁士をつとめたことがありました。

それ以来、折々、学園を訪問し、教育のあり方、私学経営のご苦労などを伺ったり、私が成田市長に就任後、同じ時期に船橋市長であった大橋和夫氏（総務省出身）と、同学園地方自治研究所の審議会の委員として十年近くお手伝いをさせて頂きました。

その中で、同学園の図書館に「万物流転天地有情」という中曽根氏の額が掲げられていることに気がつきました。まさか同氏と佐久間彊先生が、同じ東京大学の御出身で、しかも自治省（今の総務省）入省同期の中で、同省出身のOBでつくる「素心会」で今日まで長い御交際があったことを知り、驚愕を禁じ得ませんでした。

佐久間先生は、生前、中曽根先生とこのような旧知の間柄というようなことを自慢げに話したことは一度もありませんでした。

政界に身をおいてきた私には、そうしたお話は当然出てきて不思議はなかったのですが、元総理と旧知の仲ということは、私の寡聞のせいかな、ついぞお聞きしていませんでした。

学園葬での「我が畏友佐久間彊兄のご逝去を聞き、誠に驚愕に絶えず、去りし日の交友の日々を思い、心より哀悼の誠を捧げます。

私たちは、昭和十六年四月、四十七人の友人と共に内務省に採用された同期生であります。」という冒頭の言葉に始まるこの弔辞は全文を掲載したいような、情理のこもった追悼の名文でした。

この学園葬のなかで、私が特に感銘を受けた事柄が二つありました。

その一つは、佐久間彊先生と中曽根康弘氏がともに総務省入省同期ということで、お二人の年齢が九十歳の「卒寿」の年齢を迎えられていたということです。

友情の卒寿弔辞に元総理

川柳ともいえないような下手な句ですが、率直にこの句のような感動を覚えたのです。

私も、長い間、県会議員、国会議員、市長と公職を経験し、たくさんの葬儀や告別式に出席してきましたが、読まれた方が元総理大臣で八十九歳にして、かくしゃくとして、情理整然たる見事な弔辞に感嘆しました。

長い友人の御苦勞を偲び学友をたたえ、友人としてその死を悼む思いに溢れたものでした。

そして、その弔辞を贈られた佐久間彊先生も、中曽根康弘氏が三十歳ではじめて衆議院議員に立候補された際、自治省の選挙課長であったという奇しき御縁でした。

以来、お二人は、佐久間先生が教育界、中曽根康弘氏が政界と異なった世界

に身を置きながら、公私の面で交友を続け、助け合い、学び合い、共に八十九歳を迎えるまで長い間変わらぬ友情を持ち続けてこられたという間柄には、なんともいえない羨望にも似た感動を感じるものでした。

今一つ、学園葬の弔辞の中で感じましたことは、お二人の人生の生き方でした。

私は、『千葉経済学園史』で、同学園が創立以来七十四年の歴史の中で、学園関係者が、私学経営という条件の中で如何に学校経営にご苦心されてきたかを知りました。

その中で、もっとも尊敬すべき出来事は、同学園の創設者である初代校長であった佐久間惣治郎先生と長男であり同学園の二代目理事長となられた佐久間彊先生親子の劇的な場面でした。

佐久間彊先生が学園五十年史の中で、「私が中学二年の終わりに、父のその後の生涯に大きな転換をもたらし、そしてまた、私にとっても忘れがたい事件が起こった」と記された事柄のことです。

事件の概要は同学園史41頁に「佐久間惣治郎天皇陛下に上奏す」の項があり昭和6年4月12日の東京朝日新聞に突如大見出しで次のような記事が載ったのであった。

同紙の見出しは“校長退職を強要され恐れ多くも上奏す。千葉県立大多喜高女の佐久間氏が県教育界空前の事”とあり、千葉県学務課が、小学校長及び教員異動に関し、各地方の猛烈な非難攻撃を買っている折柄、さきに退職を強要された県立大多喜高等女学校長佐久間惣次郎氏によって、県教育界空前の手続きに及んだ。

それは恐れ多くも上奏の一事で、請願令によって請願書を内大臣あて書留郵便に託し発送したことである。と報じている。

上奏文の内容、顛末は同史の中で詳述されているが、この上奏、請願書の発送に際して惣治郎氏が「・・・更に数日間迷いつづけた。

そしてついあと二、三日で発令になろうという日に、大多喜町から私をつれて上京した。そして中央郵便局でもう一度迷ったが、私にどうするかと聞き、私が出しなさいと答えたのに意を決して投函した。年端のゆかぬ私をつれて上京したのは、もし上奏したならば、一家がどの様な官憲の圧迫をこうむるかもしれないので、わが子にも覚悟をさせておこうとの配慮からであったという。」

その時、佐久間彊先生は、少年ながら『お父さんが正しいと信ずることは、お父さんの思うようになさって下さい』と答えたとのことでした。」

当時は戦前で、民主主義にはほど遠い封建制というか、保守主義の時代に、適法なことと言いながら天皇に直訴の手紙を出すということは大変なことであったと思います。

私は、佐久間彊先生はこの日の出来事を契機として国家公務員としても、教育者としても、生涯、その生き方において「正義」と「公平」を貫く信条を大切に持ち続けられてきたではないかと思いました。

千葉経済学園、二代目の教育者、理事長としてその任を全うされた佐久間彊先生の学園経営に示された理念と信条は、三代目の現理事長佐久間勝彦氏、事務局長の達郎氏そして大学関係者の方々に立派に生かされ、受け継がれていると思います。

政治家中曽根康弘氏については、八十九年の人生を卓抜した手腕と力量で歩んでこられ、政界の大御所として今日もなお政治家の指導に活躍されています。

私も国会議員として十七年の在職中、衆議院の本会議や各種委員会で中曽根氏とは何度も議論を交わす機会を持ち、時には「総理」、時には「大臣」と名指しをしながら徹底した議論を重ねました。

衆議院本会議で「農業白書」をめぐる質問し、中曽根総理の答弁を求める中で、わが国の食糧政策のあり方を論じ合い、中曽根行政管理庁長官の時代には、「特殊法人の行政改革」をめぐる議論を重ね、改革の方向について、意見の一致を見る事もありました。

大臣と議員、立場は異なりますが、一対一の真剣な国政の論戦を交わす時、相手の人格と見識は、おのずと理解できるものです。

私は、中曽根康弘氏の長い政治経歴とその中に秘められた国の内外の政治に関する卓越した理念、政策については、私の知る政治家の中では、党派を超えて畏敬する総理大臣であり、大臣でありました。

こうしてお二人の教育界、政界のトップに立った指導者としての生き方は、私たちのこれからの人生に、大きな感銘と教訓を与えるものでした。

平成十九年七月二十六日のご逝去から早くも四か月、敬愛する先人としての、佐久間彊先生の遺徳を偲び、拙文を捧げ、ご冥福をお祈りする次第です。

付記

佐久間惣治郎先生の請願について、横路考弘衆議院副議長を通じて調査を依頼しましたところ、衆議院事務局より次のような回答がありました。

請願の手続きは、請願令に定められているとおり、請願要旨、氏名、年令等を文書にしたため、所管の官公署に提出することとされていた。

天皇に対する請願は、内大臣宛に提出することとされ、行幸の際に天皇に直訴することは禁止され、1年以下の懲役に処せられることとされていた。

天皇に対する請願は、内大臣が天皇に奏聞し、勅旨によって処理することとされていたが、その結果価値あるものについては、内閣に下付されていた。

国立公文書館所蔵資料に暦年ごとの請願処理文書が所蔵されている。

昭和6年については、計31件の請願が参考のため内閣に下付されており、4番に「公立中等学校長の地位保留に関する請願の件」が掲載されている。この請願書は公開されており、公文書館で閲覧することができる。